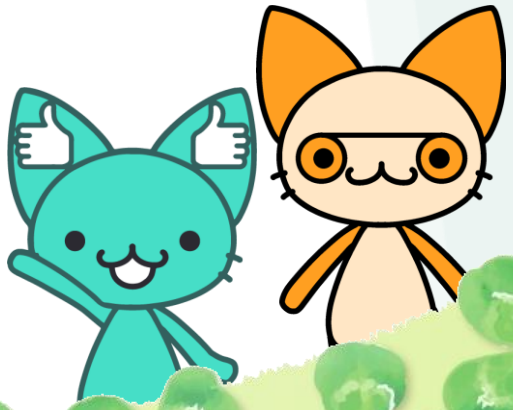
幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き

2024年9月

ベネッセ教育総合研究所



はじめに

子どもの「考える力」をもっと知りたい

異なる年齢の子どもたちが何やら熱心に外の様子を見ています。
体を寄せ合いその場を共有する３人の姿はかわいらしく、微笑ましいものです。

「この子たちは、どんなことを“考えて”いるのだろう？」

同じ方向を見ていても、その子たちが気になっていることや考えていることは違うかもしれません。
小さな子はお兄さんたちと一緒にいることが、安心できて心地よいのかもしれません。
静かに心を動かしている３人の様子を見た先生は、この場面では不用意に声をかけず見守ることにしました。

特別な場面ではない、何気ない生活や遊びの場面にも、
子どもの「考える力」が様々にありそうです。

「考える力」を育むために、どんな関わりができるだろう

次のエピソードを見てみましょう。この時、子どもたちは自分たちで図鑑を見て、調べることを楽しんでいました。恐竜に興味をもった５歳の子どもたちは「名前があるのかな」と話をしています。

A 児　　**保育者**

ティラノサウルスの“歯”って30センチなんだって

へえ～そうなんだ。
ところで30センチって何のこと？

うーん…大きさ？

よく知っているね。ものさしならもっているけど、使う？

これでやるんだ！　うん、ちょっとかりるね

30センチ、わかった！　ここまで！
（目盛りを指す）

こんなに大きいの！？　ぼくの歯はこんな小さいのに！

ここでは、恐竜の歯の大きさを示す「30センチ」という言葉に触れたＡ児に、先生が**物の大きさに注目するきっかけとして「センチって何のこと？」と声をかけ、ものさしの存在を知らせます**。答えをすぐに教えずに子どもが実際の体験を通して「分かった」と思えることを大事にするためです。

ものさしで**実際の大きさを実感したＡ児は恐竜と自分の歯の大きさを比べて驚いて**います。

この冊子では、このような何気ない場面に、どんな子どもの思考力の芽があるのかを、「思考スキル」の枠組みを用いて見ていきます。そうすることによって、ふだん保育者が無意識に行っている見とりや関わりについて、他の保育者や保護者、あるいは小学校の先生方が共に理解し、ひもとくきっかけにしていただけたらと思います。

目　次

はじめに …… 1

第１章　幼小接続期の思考力を見とり、育む …… 4

幼児期から育みたい思考力
思考力の芽生えをとらえる枠組みとして「思考スキル」を用いる

第２章　思考力の見とりと援助 …… 7

19の思考スキルと子どもの姿
1　多面的にみる
2　変化をとらえる
3　順序立てる
4　比較する
5　分類する
6　変換する
7　関係づける
8　関連づける
9　理由づける
10　見通す
11　抽象化する
12　焦点化する
13　評価する
14　構造化する
15　推論する
16　具体化する
17　応用する
18　広げてみる
19　要約する

第３章　活用事例の紹介 …… 27

思考スキルの枠組みを保育にどう生かすか
ア）子どもの力を見とる観点にする
イ）保育計画に生かす観点にする
ウ）保育計画をふりかえる観点にする

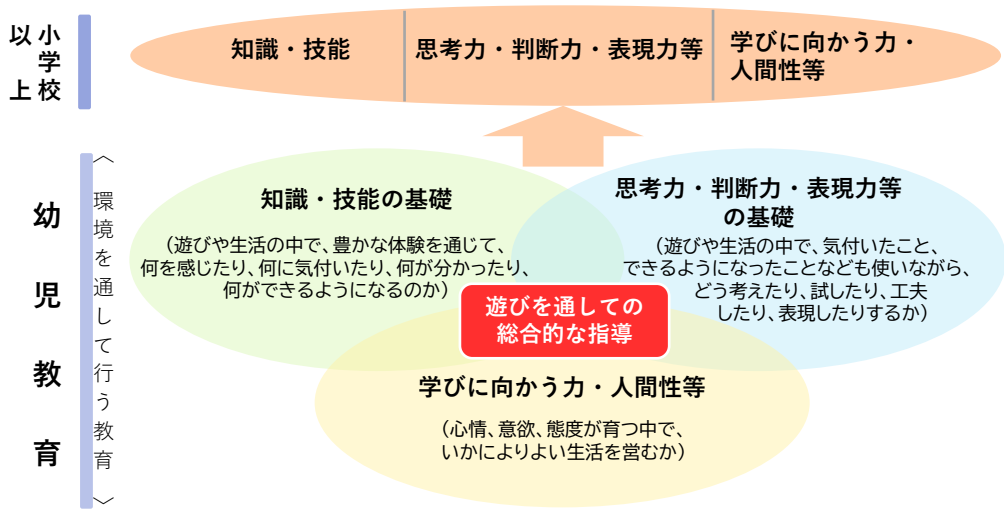
おわりに …… 31

幼児期から育みたい思考力

現代は少子化、気候変動、生成AI技術の進歩などに見られるように、先行き不透明な予測困難な状況と言われます。そのような時代を背景に、自ら課題を見つけ、学び、考え、判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく子どもを育てるにはどうしたらいいのでしょうか。

課題を解決するために必要な資質・能力として、学習指導要領では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等（以下、思考力）」「学びに向かう力・人間性等」という３つの柱が示されています。そして、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では、それらの資質・能力の基礎を、遊びを通した総合的な指導のなかで一体的に育むことが求められています（図１）。

図１　幼児教育において育みたい資質・能力の整理



※文部科学省（2016）「幼児教育部会における審議の取りまとめ」を加工して作成

本冊子では、予測困難な時代に、自ら学び課題を解決していく資質・能力として思考力に着目し、幼児期からどのように見とり育むことができるかを考えていきます。

思考力に着目する背景には、日本における幼児教育・保育の特徴として、全体として子どもの主体性を尊重し応答することへの意識が高く、それに比べると思考や探究に関わる援助はあまり重点が置かれていないことがあります[1]。よりよい社会や人生を切り拓いていくための資質・能力は一体的に育まれるものですので、様々な視点から子どもの姿をとらえることが大切です。保育者が子どもの主体性の育みとあわせて「思考力」への意識を高くもつことで、より一層、子どもの成長につながるのではないかと私たちは考えました。

また、小学校の学習活動を通して育成が目指される思考力は、入学後にゼロから育成するものではありません。思考力の“芽”の部分は幼児期から育っています。いわゆる“お勉強”として、座ってワークに取り組むような活動ではなくても、幼児が遊びのなかで「こうしたい」「ああしたらどうかな」と考えている姿のなかに、たくさんの思考力の芽生えが見られることでしょう。その力を多くの人と共有でき、援助を考えられたら、子どもは自分の力で考えることがもっと楽しくなるのではないかと考えています。

[1] 国立教育政策研究所(2023)「幼児教育におけるプロセスの質に関する研究(幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究 報告書 第2巻)」

思考力の芽生えをとらえる枠組みとして「思考スキル」を用いる

幼小接続期に子どもが発揮する思考力を、具体的にはどのようにとらえることができるでしょうか。ここでは、幼児期の遊びのなかでの育ちと小学校の学習活動とのつながりを意識しやすいように、19の思考スキルの枠組み（表１）を用いています。この枠組みは、学習指導要領において育成が目指されている思考力を、「比較する」「分類する」など具体的なスキルに表したものです。私たちは、この枠組みを用いることで、幼児期における思考力の芽生えがよりとらえやすくなるのではないかと考えました。

表１　19の思考スキルの定義

多面的にみる	多様な視点や観点にたって対象を見る
変化をとらえる	視点を定めて前後の違いをとらえる
順序立てる	視点に基づいて対象を並び替える
比較する	対象の相違点、共通点を見つける
分類する	属性に従って複数のものをまとまりに分ける
変換する	表現の形式(文･図･絵など)を変える
関係づける	学習事項同士のつながりを示す
関連づける	学習事項と実体験･経験のつながりを示す
理由づける	意見や判断の理由を示す
見通す	自らの行為の影響を想定し、適切なものを選択する
抽象化する	事例からきまりや包括的な概念をつくる
焦点化する	重点を定め、注目する対象を決める
評価する	視点や観点をもち根拠に基づいて対象への意見をもつ
構造化する	順序や筋道をもとに部分同士を関係づける
推論する	根拠にもとづいて先や結果を予想する
具体化する	学習事項に対応した具体例を示す
応用する	既習事項を用いて課題･問題を解決する
広げてみる	物事についての意味やイメージ等を広げる
要約する	必要な情報に絞って情報を単純･簡単にする

出典：泰山裕（2014）「思考力育成を目指した授業設計のための思考スキルの体系化と評価」

この枠組みを使うことで、どのようなよいことがあるのでしょうか。まず、**子どもの姿を手がかりに、思考力をとらえられる**ということです。例えば、図２（P.6）の子どもたちは、砂場でどろだんご作りをしています。思考スキルの枠組みをもって子どもたちの会話を聞いてみましょう。すると、「この砂では固まらないのに、ぬれている砂では固まる」というように、砂の違いを〔比較して〕いることや、「固まるのは、雨が降って砂が水にぬれているからかな」というように、これまでの経験から〔理由づけ〕たり〔関係づけ〕たりして考えていることが見えてきます。

次に、**子どもの思考力を育む環境構成や援助の工夫に生かせる**ことです。保育者が子どもの具体的な姿から思考力をとらえることによって、もっと子どもの経験が広がり、考えが深められるような環境を工夫することができます。

最後に、**保護者や小学校との連携を深められる**ことです。子どもに育っている思考力を、小学校の学習活動につながる力として保護者や小学校の先生にも伝えることができます。「楽しそうに、夢中で遊んでいる」という見とりから一歩すすめて「何に対して、どのように考えて、夢中になっているのか」に着目しやすくなり、子どもの興味や関心、思考のプロセスを具体的にとらえられるようになっていくのです。

図２　どろだんご作り

効果1
子どもの姿を手がかりに、思考力をとらえられる

効果2
子どもの思考力を育む環境構成や援助の工夫に生かせる

効果3
保護者や小学校との連携を深められる

砂遊びをしている子どもたちが、どろだんごを作っていますが、うまく固まらない様子です。

A児　「この砂はサラサラでうまく固まらないな。こっちの砂だと固まるのに」 → **比較する**

B児　「雨が降って砂が水にぬれているからかな」 → **理由づける 関係づける**

保育者

「どろだんごを作るために、土砂の様子を『**比べ**』て、水の量と固まりやすさを『**理由づけ**』たり『**関係づけ**』たりしているわ。なぜかたさに違いができるのかをもっと考えられるように、今度は田んぼの土でも作らせてみよう」

保育者
（保護者や小学校の先生に思考スキルの枠組みを示しながら）

「砂遊びのなかで発揮される力は、小学校の学習活動でも育成が目指されている大切な力なんですよ」

「思考スキル」の枠組みを使った保育者の声

漠然としていた、「幼児期の思考力って何だろう」ということが具体的に見えるようになった

子どもに付いてきた力を見とることで、どのような関わりができるか気づけるようになった

遊びを通して学びの芽が育っていることを、保護者や小学校の先生に伝えられることで、保育への自信につながった

また、保育者から「非認知能力」の育ちが見えるようになってきた、という声も聞かれました。

- 「やさしさ」や「おもいやり」があるということは、相手の視点にたつ〔多面的にみる〕ことや、相手にとっての分かりやすさを〔見通す〕という思考スキルがあることだと気づいた。そこから、思考スキルのようないわゆる“認知能力”と一体的に育まれる“非認知能力”のつながりが見えるようになってきた。

このように、子どもの力を見とって他の保育者と共有し、保育の改善につなげることや、遊びを通して育っている力を可視化して、保護者にも伝えていくという活用が期待できます。

19の思考スキルと子どもの姿

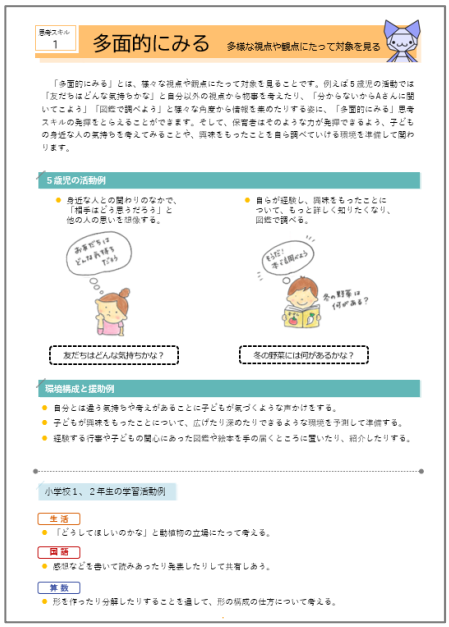
本章では、19の思考スキルについて、遊びのなかで子どもが発揮する思考力を見とったり、その発揮をさらに促したりするような環境構成や援助例をまとめています。

あくまで例ですので、この思考スキルを発揮するためにはこの活動をするとよいという画一的なものがあるわけではありません。例えば、ある子が“図鑑で調べている”からといって、「多面的にみる」思考スキルだけを発揮しているとは限りません。その子は図鑑を見ながら、形が似ている何かと何かを「比較して」いるのかもしれませんし、「魚の仲間分けには『口』の形の違いがありそうだ」と「焦点化して」いるのかもしれません。もちろん、いくつかの思考スキルを同時に発揮していることもあるでしょう。表面的には同じ姿が見えていても、その子どもの言葉や様子、これまでの関心や活動などの様々な視点から見ることによって、多様な思考スキルが発揮されていることに気づいていきます。

活用にあたっては、そのような思考力の芽を発見することを楽しみながら、保育者としての関わり方を考えたり、他の保育者や保護者に伝えたりする観点にしていただきたいと思います。また、19の思考スキルを全て意識して見とり、援助を考えることは実際には難しいことでしょうから、まずは3つ程度意識することから始めてみるのがよいでしょう。

そして、「遊び」と「学び」のつながりを意識できるように、小学校以降の学習活動も示しました。保育環境や援助の工夫によって支えられる幼児期の思考力の芽の育みと、小学校以降の学習活動とのつながりを保護者や小学校の先生に伝える観点として、ご活用ください。

各思考スキルの発揮の見とり方と援助


思考スキル 1
多面的にみる　多様な視点や観点にたって対象を見る

「多面的にみる」とは、様々な視点や観点にたって対象を見ることです。例えば5歳児の活動では「友だちはどんな気持ちかな」と自分以外の視点から物事を考えたり、「分からないからAさんに聞いてこよう」「図鑑で調べよう」と様々な角度から情報を集めたりする姿に、「多面的にみる」思考スキルの発揮をとらえることができます。そして、保育者はそのような力が発揮できるよう、子どもの身近な人の気持ちを考えてみることや、興味をもったことを自ら調べていける環境を準備して関わります。

5歳児の活動例

- 身近な人との関わりのなかで、「相手はどう思うだろう」と他の人の思いを想像する。
- 自らが経験し、興味をもったことについて、もっと詳しく知りたくなり、図鑑で調べる。

友だちはどんな気持ちかな？

冬の野菜には何があるかな？

環境構成と援助例

- 自分とは違う気持ちや考えがあることに子どもが気づくような声かけをする。
- 子どもが興味をもったことについて、広げたり深めたりできるような環境を予測して準備する。
- 経験する行事や子どもの関心にあった図鑑や絵本を手の届くところに置いたり、紹介したりする。

小学校１、２年生の学習活動例

生活
- 「どうしてほしいのかな」と動植物の立場にたって考える。

国語
- 感想などを書いて読みあったり発表したりして共有しあう。

算数
- 形を作ったり分解したりすることを通して、形の構成の仕方について考える。

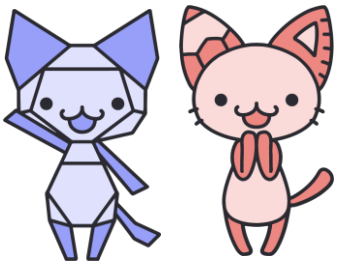
① 【思考スキル】
小学校以降の学習活動にもつながる思考力の枠組み

② 【活動例】
思考スキルを発揮していると思われる5歳児の活動の例

③ 【環境構成と援助例】
思考スキルの発揮を促す保育者による援助の例

④ 【小学校での学習活動例】
小学校（主に1、2年生）での学習活動例

まずは、思考スキルを３つ程度意識することから始めてみましょう



次ページからは、19の思考スキルを１つずつ紹介していきます

思考スキル
1

多面的にみる

多様な視点や観点にたって対象を見る

「多面的にみる」とは、様々な視点や観点にたって対象を見ることです。例えば５歳児の活動では「友だちはどんな気持ちかな」と自分以外の視点から物事を考えたり、「分からないからAさんに聞いてこよう」「図鑑で調べよう」と様々な角度から情報を集めたりする姿に、「多面的にみる」思考スキルの発揮をとらえることができます。そして、保育者はそのような力が発揮できるよう、子どもの身近な人の気持ちを考えてみることや、興味をもったことを自ら調べていける環境を準備して関わります。

５歳児の活動例

- 身近な人との関わりのなかで、「相手はどう思うだろう」と他の人の思いを想像する。

友だちはどんな気持ちかな？

- 自らが経験し、興味をもったことについて、もっと詳しく知りたくなり、図鑑で調べる。

冬の野菜には何があるかな？

環境構成と援助例

- 自分とは違う気持ちや考えがあることに子どもが気づくような声かけをする。
- 子どもが興味をもったことについて、広げたり深めたりできるような環境を予測して準備する。
- 経験する行事や子どもの関心にあった図鑑や絵本を手の届くところに置いたり、紹介したりする。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 「どうしてほしいのかな」と動植物の立場にたって考える。

国 語

- 感想などを書いて読みあったり発表したりして共有しあう。

算 数

- 形を作ったり分解したりすることを通して、形の構成の仕方について考える。

思考スキル
2

変化をとらえる

視点を定めて前後の違いをとらえる

「変化をとらえる」とは、身近な対象を観察したり感じたりするなかで、変化や移り変わりに気づくことです。保育の場面では、野菜や虫などの動植物の成長の様子を観察して「大きくなった」「色が変わった」と驚いたり、お散歩など屋外活動で季節の移り変わりを感じたりする姿に「変化をとらえる」力を見とることができます。子ども自身が変化を感じ、心が動く体験ができるように、変化に触れられる環境を用意し、一緒に観察を楽しむなどの工夫ができるでしょう。

5歳児の活動例

- 身近な植物や事象と関わるなかで、時間の経過などによって、対象の形・色・大きさなどが変わることに気づく。

トマトが緑色から赤色になることに気づいている

季節の変化を感じている

環境構成と援助例

- 子どもが自然などの対象に触れる体験を通して、それらの変化を感じ取れるような環境を用意し、変化を気にかけたくなるような声かけをする。
- 時間の経過のきっかけとなる言葉に共感したり、気づきを認めたりすることで、変化に対して子どもの関心が向くようにする。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 季節の変化によって生活が変わっていくことを実感したりしていくなかで、その違いや特徴を見つける。
- 同じ性質や変化があること、異なる特徴や違いがあること、時間の変化や繰り返しがあることなどに注意を向け、自覚する。
- 動植物が育つなかでどのように変化し成長していくのかに関心をもって働きかける。

思考スキル
3

順序立てる 視点に基づいて対象を並び替える

「順序立てる」とは、「お店屋さんごっこの準備をどんな順番でするといいかな」などと、段取りや順番を考えるような姿に見とることができるスキルです。しかし、子どもは「これもあれもしたい」「好きなことを早くしたい」といった思いが先に立つことがよくあり、実行の順序を適切に考えることが難しい場面も多いでしょう。そのような場合は「まずどうする？」と聞いて、“最初”を意識できるように促したり、「どんな順番ですると、楽しいかな」などと話しかけたりして、子ども自身が考えられるように援助していきます。

５歳児の活動例

- 身近な人との関わりのなかで、もっと遊びを楽しくするための段取りや、順番を考える。

例１）
遠足のおやつを食べるのは、山に登る途中か後かなど、一日のどこにするとよいかを考える。

例２）
お店遊びをするためにどのような順番で用意をするとよいか考える。

環境構成と援助例

- 「まずどうする？」と聞き、子どもが最初を意識できるようにする。
- 取り組みたい遊びの準備などについて、子ども自身が順序を考えられるように促す。

小学校１、２年生の学習活動例

国 語

- 話す事柄の順序について考える。
- 行動したことや経験したことの順序に気をつけて話を構成する。
- どのような順序によって説明されているかを考えながら文章の構造を大まかにとらえ、それを手がかりに内容を正確に理解する。

思考スキル
4

比較する

対象の相違点、共通点を見つける

「比較する」とは、違うところや似ているところを見つけることです。遊びや生活のなかでは、くだものの大小を比べたり、自分と友だちの身長を比べたり、様々な場面で子どもが自然に発揮している姿を見とることができるでしょう。例えば、じゃがいもの“数”の違いだけではなく、“重さ”に関心が向いた時に備えて、計量器を準備しておくなど、子どもが「比べる」ことを楽しめるような環境を準備することができます。

5歳児の活動例

- 遊びや自然との関わりのなかで、興味をもった対象について、特徴（数量、色、形など）の違いをとらえる。

どちらが高いかな

何が違うのかな

環境構成と援助例

- 子どもが関心をもち、共通点と違いを比べたくなるような対象に出あう機会を作る。
- 同じものでも、種類や条件などによって違う状態になることの不思議さに気づけるようにする。
- 重さや長さの違いに関心をもった時に比べやすくなるように、道具や材料を準備しておく。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 同じ性質や変化があること、異なる特徴や違いがあること、時間の変化や繰り返しがあることなどに注意を向け、自覚する。
- 秋の公園に出かけドングリを拾って遊ぶ。たくさん集まったら、大きさや形、色などで分けたり、並べたりして遊ぶ。
- 自分の作った車を友だちの車と比べて「土台を軽くすればよい」と予想したり予測したりして考える。
- 「違いがあるぞ」と変化や成長の様子を比べたり、現在の自分を見つめ過去の自分と比べたりする。

算 数

- 目的に応じて直接比較をして比べる。
- どのくらい違うのかを知りたい時は数値化して比べる。
- 目的に応じて効率よく数量の大きさを比べる。
- 具体物の手際のよい比べ方や数え方を考えていく。

思考スキル
5

分類する

属性に従って複数のものをまとまりに分ける

「分類する」とは、属性に従って複数のものをまとまりに分けることです。例えば、5歳児は遊びや生活のなかで、石を集めて色や大きさで分けたり、野菜を夏と冬に収穫できるもので分けたりします。保育者は、子どもが関心をもつ対象に出あい、その特性に気づき、分ける楽しさを感じられる環境を整えることが重要です。例えば、言葉遊びでは「赤いもの」や「くだもの」といった簡単な観点を決めて、グループ分けの手がかりを示すこともできます。

5歳児の活動例

- 遊びや生活のなかで、興味や必要感をもち、簡単な観点を決めてグループ分けを行う。

いろいろな形が
あるね

「う」から始まる
言葉分け遊びをしよう

環境構成と援助例

- 子どもが関心をもつ複数の対象に出あい、その特性に気づき、分ける必要感や楽しさを感じられる環境を準備する。
- 様々な言葉に触れて遊ぶ時に、「赤いもの」「くだもの」「夏のもの」などグループ分けにつながるような手がかりを示す。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 自然の様子や生活の様子を比べたり、仲間分けしたりして考える。
- 秋の公園に出かけドングリを拾って遊ぶ。たくさん集まったら、大きさや形、色などで分けたり、並べたりして遊ぶ。

算 数

- 具体物の手際のよい比べ方や数え方を考えていく。
- 辺の長さや直角の有無といった約束に基づいて図形を弁別する。

思考スキル
6

変換する

表現の形式（文・図・絵など）を変える

「変換する」とは、表現の形式（文・図・絵など）を変えることです。5歳児は、絵本を読んだ内容を絵に描いたり、言葉による表現が難しい時に色や形で表現したりします。また、目印や記号を用いて、身近な人に分かりやすく伝えたり、自分で覚えたりする工夫を行うこともあります。保育者は、子どもの表現を尊重し、「どうすると、分かりやすくなるかな？」などと一緒に考えながら、感じたことを絵や図で表現できる環境を整えます。

５歳児の活動例

- 絵本を読み聞かせてもらったり自分で読んだりして、興味をもった内容について、絵に描く。

- 言葉による表現が難しい時に、自分で認識するために色や形で表現する。
- 身近な人に分かりやすく伝えたり、自分で覚えておいたりするために、目印や記号を用いる。

環境構成と援助例

- 子ども一人ひとりの表現をそのまま受け止め、表現することの楽しさが感じられるようにする。
- 絵本の絵を見て、どのような発見があったかを話しあう。
- 相手に伝わりやすくするための方法について、一緒に考える。
- 感じたことや考えたことを、絵や図に表現できる環境を整える。
- 子どもの興味関心をとらえ、それらに関わる絵や写真などの情報や材料を子どもやグループの近くに配置する。

小学校１、２年生の学習活動例

算 数

- 身の回りにある自然事象に関する数の大小関係を、絵などを用いて整理して表現し、どの項目がどの程度多いのかといったことをとらえる。
- 表やグラフを用いることで、簡潔になることや、視覚的に分かりやすくなることに気づく。

思考スキル
7

関係づける

学習事項同士のつながりを示す

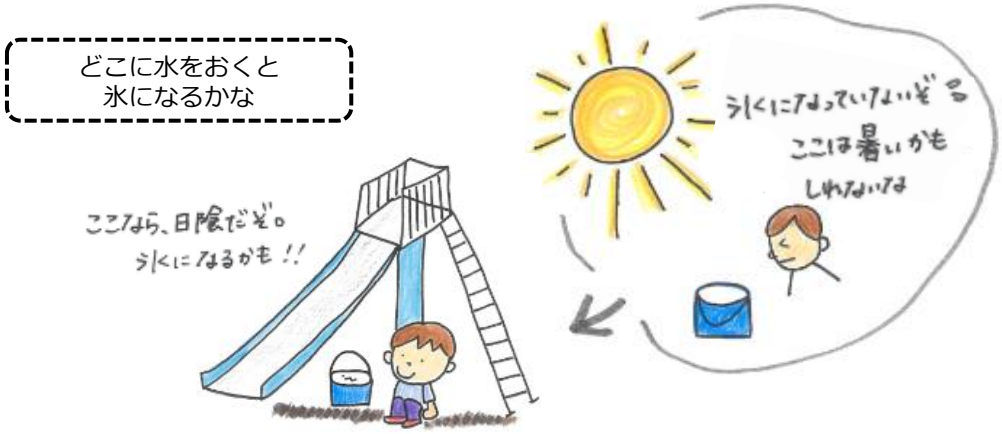
「関係づける」とは、ものごと同士のつながりを示すことです。例えば、5歳児は遊びや生活のなかで「前にした時には…」と経験の関係を見つけることや、紙を折って冊子を作りながら必要な枚数の関係を見つけていることがあります。保育者は「前はどうだったかな？」などと声をかけ、子どもの気づきをつないで整理し、意識を促します。こうした援助を通じて、子どもが自分で関係性を発見する力を育てます。

５歳児の活動例

- 遊びや生活のなかで、これまでの園における経験同士の関係を見つける。
- 遊びや生活のなかで、必要性や便利さに気づき、数量や位置の関係を見つける。
- 季節の変化や時の経過と自然現象についての関係を見つける。

環境構成と援助例

- 子ども自身がものごとの関係に気づけるように、保育者が先回りをせず、子どもの気づきを整理して意識づける。
- 子どもが不思議に感じていることや疑問に思うことをとりあげ、これまでの園の体験とつなげられるようにする。
- 子どもが数量の感覚や自然現象の不思議さに気づけるような材料を用意する。



小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 「どうしてほしいのかな」と動植物の立場にたって考える（自分の行為とその結果を結びつける）。

国 語

- 物語のなかのどの場面のどのような様子と結びつけて読むかを明らかにする。
- 相手の発言に関連した発言をすることで話をつなぐ。

算 数

- 既習の数量の見方や計算の仕方を活用することで、未習の計算の仕方を見つけ出していく。
- 時間の単位に着目し、短針や長針の動きを基に経過した時間をとらえて、日常生活に生かす。

思考スキル
8

関連づける

学習事項と実体験・経験のつながりを示す

「関連づける」とは、園における経験と日常経験を結びつけることです。例えば、子どもは園における友だちとのごっこ遊びのような場面で、家庭や地域において体験したことと結びつけて、遊びを発展させていくことがあるでしょう。保育者は子どもが興味をもっている遊びや園における行事等と、家庭や地域の経験とをつなげ、子どもの気づきや学びを深めるサポートをします。

※ 便宜上、園における経験同士については「関係づける」、園での経験と園以外での経験については「関連づける」としています。実際には、子どもの経験を園か園以外かで分けにくいでしょうから、この２つは同様に見とることがよいでしょう。

５歳児の活動例

- 園における遊びや生活における体験と、家庭や地域における四季の変化や数量的な感覚などの体験を結びつけて考える。

環境構成と援助例

- 子どもの気づきに関連した活動やお話をして、子ども自身が経験を結びつけられるようにする。
- 遊びや関心が広がっていきそうな子どもの言葉をひろい、これまでの体験とつなげられるようにする。
- 園で関心をもっていることを保護者に伝え、保護者にも家の様子を教えてもらう。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 学校探検で見つけた図書室の様子を友だちと話しあうなかで、施設の位置や働きなどについて考える。
- 家族一人ひとりの存在や仕事、役割、家庭における団らんなどが、自分自身や自分の生活とどのように関わっているかを考える。
- 試行錯誤を繰り返しながら、遊び自体を工夫したり、遊びに使うものを工夫して作るなどして考えを巡らせる。

国 語

- 身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な情報を選ぶ。
- 文章の内容を、自分が既にもっている知識や実際の経験と結びつけて解釈し、想像を広げたり理解を深めたりする。

算 数

- ものの形や立体が身の回りでどのようなところに見られるか、それらの用いられ方にどのような特徴があるかということに気づく。
- 時間の単位に着目し、短針や長針の動きを基に経過した時間をとらえて日常生活に生かす。

思考スキル
9

理由づける　意見や判断の理由を示す

「理由づける」とは、自分の意見の理由を考えたり伝えたりすることです。例えば、子どもは遊びをもっと楽しくするためのアイディアやルールを考え、友だちに分かってもらうためにその理由を言うことがあります。また、不思議な自然現象に出あい、その理由を考えることもあるでしょう。保育者は子どもが心に留めた現象について「どうしてかな」と声をかけて、子どもの考えを促します。場合によっては、理由を言うことが難しい発達段階や状況があって理由を無理に尋ねないほうがいいこともあるでしょう。その子の心の動きに共感しつつ、思いを周りに伝えられるようなサポートが大切です。

5歳児の活動例

- 心が動く状況や現象に出あい、その理由を考えようとする。
- 遊びを楽しくするためのルールや自分のアイディアを思いつき、その理由を話す。
- 「こうしたい」という自分の願いや思いを通すための根拠を述べる。

環境構成と援助例

- 様々な状況や現象に触れ、その不思議さを感じられるようにする。
- どうしてそう思うのかを聞き、子どもが考える機会をもてるようにする。
- 子どもが不思議に思ったことを一緒に調べたり、分かった喜びを共有したりする。

小学校1、2年生の学習活動例

国語

- 主人公などの登場人物について、着目した場面の様子などの叙述を基に行動の理由を想像する。

算数

- 具体物や図などを用いて、計算の仕方を考えたり、説明したりできる。

思考スキル
10

見通す

自らの行為の影響を想定し、適切なものを選択する

「見通す」とは、先のことを見すえて計画したり行動したりすることです。例えば、5歳児は積み木遊びのなかで「もっと高く積むにはどうしたらいいかな」と考えて、小さい積み木を選んだり、積み方を工夫したりすることがあるでしょう。保育者は子どもが関心をもったことに対して「どうしたらうまくいくかな」などと声をかけ、時にはヒントを与えながら、子ども自身がその方法に気づけるように支援を行います。

5歳児の活動例

- 先の活動を見すえた行動をとったり、計画したりする。
- 身近な事象や事柄について、次はこうなるのではないか、または、こうなってほしいと予想をする（根拠は感覚的なものであることが多い）。
- 身近な人を喜ばせようとして計画をしたり、分かりやすいように伝え方を工夫したりする。

もっと高く積むには
どうしたらいいかな

どうやって行くといいかな

環境構成と援助例

- 日頃の生活のなかで、子ども自らが見通しをもてるような関わりをする。
- 子どもが関心をもったことについて見通しがもてるように援助をし、納得がいくまで取り組めるようにする。
- 身近な人を思いうかべ、その人が嬉しい気持ちになる関わり方を考えられるようにする。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 「多分そうだろう」と予想して見通しを立てる。
- 自分のこととして行うべきことや家庭での喜びや気持ちよい生活のための工夫などについて、何が自分でできることかを考える。
- 自分の作った車を友だちの車と比べて「土台を軽くすればよい」と予想したり予測したりして考える。
- 誰を対象とするのか、何を伝えるのか、どのような方法で伝えるのかについて考える。

国 語

- 聞き手を意識して、聞き手に伝わるかどうかを想像しながら話の構成を考える。

算 数

- 目的に応じて大きさをとらえるのに適切な単位を選択して測定し、大きさを表現したり、大きさを比べたりする。
- 何を知りたいかによって、着目する観点を考えられるようにする。

思考スキル
11

抽象化する

事例からきまりや包括的な概念をつくる

「抽象化する」とは、遊びや生活における具体的な経験から一般的なきまりに気づくことです。例えば、色水に紙の下の方を浸すと上まで染み込む様子や、異なる花の色水を混ぜた時の様子を観察し、水や紙、色の性質に気づくようなことがあるでしょう。保育者は子どもが興味をもっているものに実験的に取り組める環境を整え、気づきを共に楽しみながら、子どもが試行錯誤できる援助を行います。

５歳児の活動例

- 興味をもった対象について、遊びのなかで繰り返し扱ったり観察したりすることを通して、対象の性質に気づく。

例１）
色水に障子紙を浸すと、先生だけではなく誰がしても吸水する紙の様子を見て、水と紙の性質に気づく。

例２）
砂場に池を作りたいが、砂場ではバケツではなくホースで一度に水を入れないと作ることができないことに気づく。

環境構成と援助例

- 子どもが興味をもっているものに実験的に取り組める活動と時間を整え、不思議さを感じたり発見を楽しんだりしながら特徴をとらえられるようにする。
- 子どもの気づきを一緒に面白がったり共感したりして、子ども自身が試行錯誤して考えを深める援助を行う。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 通学路において、その様子やその安全を守っている人々の存在や役割が自分たちの安全な登下校を守り支えていることについて考える。
- 季節の変化によって生活が変わっていくことを実感していくなかで、その違いや特徴を見つける。
- 影踏み遊びでは、「影に入ると、逃げなくても大丈夫」「自分の前に影を作って逃げると踏まれにくいよ」と光と影の関係を見つける。

算 数

- ３の段の九九の構成を通して「かける数が１増えれば答えは３ずつ増える」という計算に関して成り立つ性質を見つける。
- 「平らな面ならば重ねられる」など、その形のもつ性質や特徴を用いて目的を達成したり問題を解決したりする。
- 「16+8と8+16の答えは同じ」など、具体的な場面に基づいて、数量の関係に着目し、計算に関して成り立つ性質を見いだす。

思考スキル
12

焦点化する

重点を定め、注目する対象を決める

「焦点化する」とは、大切な情報や対象に注目することです。例えば、リレーで勝つためには、「バトンを渡すときにスピードが落ちないようにしよう」などと、ある観点に着目するような姿に見てとれます。子どもだけでは絞り込むことが難しい場面では、子どもはどのような点に着目したいかについて保育者が気づきを促すことも大切になります。例えば、動物とのふれあいの場面を絵に描きたい時に、「どんなところが一番かわいかった？ おどろいた？」などと声をかけることで、子ども自身が、印象に残ったことを意識し、テーマを決めることができるでしょう。

5歳児の活動例

- 自分が知りたいことや興味があることに注目する。
- 遊びや生活を楽しくするために、大切だと思うポイントに注目する。
- 相手に伝えたいことがたくさんある時に、大切だと思うポイントを決める。

例１）
子馬と関わったなかで、一番印象に残ったことを決める（その後に絵を描く）。

例２）
リレーに負けて悔しい、次は勝ちたいという気持ちから、バトンを渡す時にスピードが落ちないようにするとよいと考えて、繰り返し練習を行う。

環境構成と援助例

- 遊びのルールを決める時に、どんな点が大切になるか、自分たちで考えることを促す。
- 子どもたちが複数の意見から１つに決める時、どのような点に着目して決めるとよいか、子どもたち自身が考えられる手がかりを伝える。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- インタビューを通して地域の農作物の生育条件に目を向けるようになる。

国 語

- 身近なことや経験したことなどのなかから話題を決め、必要な情報を選ぶ。
- 自分の聞きたいことを明確にして話を聞く。
- 書くことを見つけ、必要な事柄を集めて伝えたいことを明確にする。
- 文章のなかの重要な語や文を考えて選び出す。

算 数

- 紙の４か所を直角に折っていって、長方形を作る活動を通して、図形を構成する要素に着目させる。

思考スキル
13

評価する

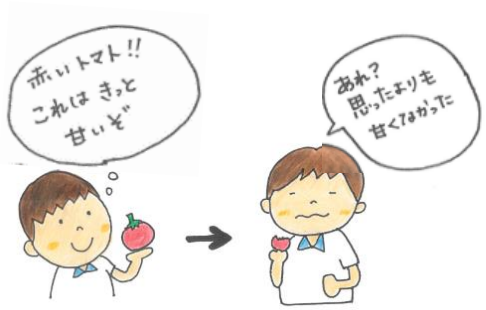
視点や観点をもち
根拠に基づいて対象への意見をもつ

「評価する」とは、自分の意見や感想をもち、そこから物事を考えていくことです。例えば、子どもは友だちの意見を聞いて自分の考えを変えたり、自分の感覚的な考えを図鑑や本で確かめたりします。保育者は、子どもたちが自分の感想や考えをもてるよう、「やってみてどうだった？」「それであっているかな？」などという声かけを通じて支援することが大切になります。

5歳児の活動例

- 友だちなど身近な人の考えを聞いて、それに対する自分の考えを言ったり修正したりする。
- 感覚的な自分の考えについて、それでよいかを周りの友だちや先生に聞いたり、本で調べたりして実際に確かめる。

やってみてどうだった？



自分で作ったトマトの味はどう？

環境構成と援助例

- 先生や友だちの考えについて、どう思うかを伝えあう機会を作る。
- 子どもが自分の考えについて本当にそれでよいのかを確かめたい時に、その事柄に詳しい本や人を紹介する。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 他の遊びを真似してルールを改善したりしながら遊びを発展させていく。
- 自らの働きかけに対して「どうだったかな」と反応や結果を考えたり、継続してきた活動をふりかえって「だからそうなんだ」と自分とつなげて考えたりする。
- 現在の自分を見つめ、過去の自分と比べることで、自分らしさや成長し続けている自分を実感する。

国 語

- 自分の文章のよいところを見つける。
- 内容のまとまりが明確になっているかを確かめながら書く。
- 文章を読んで理解した内容と自分の体験とを結びつけて、感想をもつ。

算 数

- ２つずつ数えるなど数のまとまりを作り、そのまとまりに着目して数えたり比べたりする考えを見いだせるようにする。
- 計算に関して成り立つ性質を活用して新しい計算の仕方を生み出したり計算の仕方を工夫したりする。

思考スキル
14

構造化する　順序や筋道をもとに部分同士を関係づける

「構造化する」とは、物事の順序やつながりを整理してまとめることです。例えば、運動会の曲を選ぶ時に、子どもたちがそれぞれの曲のよい点を話しあい、最終的に入場曲やダンスに使う曲を決めるような姿に見てとることができます。また、劇遊びをする時に、「けんかしていたけど仲直りをして、最後に手をつなぐお話がいい」というような、構成を考える姿もあるでしょう。保育者は子どもたちが意見を十分に出しあえる機会を提供し、うまく整理できない時にはその援助にあたるなどのサポートをします。

５歳児の活動例

- 身近な目的や問題の解決のために、必要なものや情報をとらえ、それらを組みあわせる。
- 劇遊びなどをするために、話の流れ（最初～最後）をどうするかを話しあう。

例１）
運動会で使う曲を３つの候補から決める時に、それぞれの曲のよさや、どのような場面で用いるとよいかなどを話しあい、曲Ａを入場曲に曲Ｂをダンスに用いることに決める。

例２）
お話を作る時に、けんかをして、仲直りをして、
皆が手をつないで終わる話がいいと言う。

環境構成と援助例

- 子どもが意見を言ったり聞いたりする経験を重ねられるようにする。
- 子どもが伝えたいことをうまく整理できていない時に、「どうしたらもっとよくなるかな」「ＡさんとＢさんの考えは同じだね」などと話を整理して考えが進められるようにする。
- 劇や行事などの流れについて、子どもたちの具体的な希望をつなぎ、全体を通して考えられるようにする。

小学校１、２年生の学習活動例

国 語

- 聞き手を意識して、聞き手に伝わるかどうかを想像しながら話の構成を考える。
- 構成を考えることによって自分の考えを明確にしていく。
- 簡単な構成を考える際には、文章には「始め－中－終わり」などの構成があることを意識できるようにする。

思考スキル
15

推論する

根拠にもとづいて先や結果を予想する

「推論する」とは、根拠を基に先のことを予想することです。例えば、ある子どもが、公園の湿った場所で虫を見つけたことを覚えていました。その子どもは、別の公園でも同じような虫を探そうとして、湿った場所に行くことがあるでしょう。工作のお片づけの場面で、接着剤が固まらないようにする時にも、これまでどのような時に固まってしまったかという経験からの予想が役立ちます。保育者は自分がもっている答えをすぐに与えるのではなく、「この前はどうだったかな」「こうなるかもしれないね」などと声をかけ、子どもが経験を思い出して、様々な予想をできるような援助を行うことができます。

5歳児の活動例

- これまでに経験したり、聞いたりしたことを根拠として、先がどうなるかを予想する（願いや空想ではなく、実際に体験したり経験したりしたことを根拠として、再現性が高そうだと予想する）。

例1）
落ち葉や石の下に虫を見つけたという経験から、じめじめしたところには虫がいるのではないかと予想をして虫探しをする。

例2）
乾燥しやすい冬にフタが開いていて接着剤が固まった経験から、接着剤を固まらせずに使うためにはフタをしっかり閉めて乾燥させないようにするといいと言う。

環境構成と援助例

- 子どもが予想しようとする時に、これまでの経験や知っていることを思い起こせるような問いかけを行い、子ども自身が様々に予想できるようにする。

小学校1、2年生の学習活動例

生活

- 図書館の機能やそこで働く人の役割を予想しながら、図書館の人にインタビューすることを話しあう。

国語

- 場面の様子から、なぜ登場人物がそのような行動をとったか、想像したことを伝えあう。

思考スキル
16

具体化する　学習事項に対応した具体例を示す

「具体化する」は、抽象的な事柄や未知のことを具体的な例を通じて理解しようとすることです。例えば工作で「地震に強い家を作ろう」と思い「そのためにはどうしたらいいかな」と柱の太さを工夫するなどの姿に見とることができます。また、センチメートルとメートルの単位など、知らないことについて、実際に身長計で単位の違いを見てその大小に気づく姿にも「具体化する」姿が見られるでしょう。保育者は子どもが初めて出あう概念や言葉について、具体的なものやことと結びつけて理解を深められるようなサポートを行います。

5歳児の活動例

- 抽象的な事柄や確かには知らない事柄について、分かりやすく具体的にとらえようとする。

例１）
「『なかま』ってどういう意味だろう？」という友だちの投げかけに、「同じクラスの友だちのことじゃない？」と答える。

例２）
164センチの先生と２メートルの選手はどちらが大きいのかな？という疑問を受けて、保育者が身長計を出して示すと、その単位が示している大きさの違いに気づく。

環境構成と援助例

- 子どもが知らないこと（言葉や単位など）に触れた時に、具体的なものやことと結びつけられるようにする。

※ 幼児期はたくさんの具体的な事柄から抽象化することができるようになっている時期のため、その逆を子どもたちだけで行うことは難しいことがあります。そのため、保育者が具体化を意識して、「それってこういうことかな」と、子どもが初めて出あう事柄について具体的にとらえられるような援助をしていくことが大切です。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 試行錯誤を繰り返しながら、遊び自体を工夫したり、遊びに使うものを工夫して作ったりする。

算 数

- 大きな数を数えたり比べたりできるようになっていることを、ひまわりの種や木の実を数えるなどといった様々な場面で使う。
- 「2+2＝4」は具体的には、お皿に2つずつみかんがのっているなど、具体物と数とを結びつける活動を十分に行う。

思考スキル
17

応用する

既習事項を用いて課題・問題を解決する

「応用する」とは、これまでの知識や経験を生かして、新たな課題の解決に役立てることです。例えば、自分たちが育てた野菜をカラスから守るために、これまでの経験から光るディスクを使ってカラスを追い払うことを思いつくような姿に見てとることができます。保育者は子どもが直面する問題に対してすぐに解決策を示すのではなく、状況を整理したり、これまでの経験を思い起こす手伝いをしたりして、子ども自身が考えられるように促します。

5歳児の活動例

- これまでの課題解決の方法を他の場面で用いたり、知っていることを実際の場面で用いたりして、新たな課題解決をする。

環境構成と援助例

- 子どもが直面している課題について、すぐには答えを示さず、必要に応じて子どもが理解できるように状況の整理を援助しながら、子どもたちで課題解決ができるように見守る。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 1年生の時の経験や教科書を参考にして、栽培する時期や場所などの条件を考えながら、自分で育てる野菜を選ぶ。

算 数

- 園児を小学校に招いたお店屋さんごっこの場面で、足し算や引き算で学んだことを生かして、学習用のおかねを用いたやりとりを行う。

思考スキル
18

広げてみる

物事についての意味やイメージ等を広げる

「広げてみる」とは、物事の意味やイメージを広げていくことです。例えば、子どもはお絵描きや工作を通じて、「こんなふうに作ったら面白そう」と様々なアイディアをもったり、素材を用いたりしながら自分の作りたいもののイメージを広げていきます。あるいは、劇遊びのなかで登場人物の話し方や動きを自分なりのイメージで工夫する姿もあるでしょう。保育者は日々の活動や遊びのなかで、子どもの興味をとらえ想像を広げていけるような環境を工夫していきます。

５歳児の活動例

- お絵描きや工作などで様々な素材に触れ、作りたいもののイメージを広げていく。

環境構成と援助例

- 子どもが関心をもった日頃の活動を、遊びのなかでもつなげられるような活動や環境を用意する。
- 見立て（ごっこ）遊びが広がるように、様々な感触・色・形の材料を用意する。

小学校１、２年生の学習活動例

生 活

- 家族に目を向け、関心をもつことで、家庭の生活における自分の存在や役割が明らかになり、自分との関わりで家庭の生活を見つめ直す。
- 地域の場所や地域の人、それらが自分とどのように関わっているかを考える。

国 語

- 絵や写真から場面や登場人物の会話、行動を想像し、言葉を書き添えたり、お話を作ったりする。
- 本の表紙や題名からどんな話が展開されるのかを予想する。
- 登場人物の行動や会話について、何をしたのか、なぜしたのかなどを具体的に思い描きながら、その世界を豊かに想像する。

思考スキル
19

要約する

必要な情報に絞って情報を単純・簡単にする

「要約する」は、必要な情報に絞って簡潔に伝えることです。例えば、友だちの前で自分の考えをひと言で述べる場面や、保育者に対して自分の大切なことを簡潔に伝えるような場面でスキルの発揮を見とることができます。もちろん、子どものまとまらない気持ちをそのままに受け止めることも、とても大切ですので、いつも短く伝えるように促す必要はありません。例えば、集まりの会で皆の意見を出しあう時など、子ども自身が必要を感じられる場面で、保育者は「まとめて話してみようか」などと声かけができるとよいでしょう。

５歳児の活動例

- 遊びや生活のなかで、自分や身近な相手にとって、特に大切だと思うところに絞って話したり書いたりする。

例１）
友だちの前で発表する場面で、自分の思ったことをひと言で話す。

例２）
保育者に子ども同士のけんかやケガの状況を簡潔に伝えようとする。

環境構成と援助例

- 一定の時間や大きさの紙面などにおいて、子どもが伝えたいことを表現する機会を設ける。

小学校１、２年生の学習活動例

国 語

- 集めた事柄の全部を話のなかに取り入れるのではなく、伝えあうために必要な事柄かどうかを判断して選ぶ。

思考スキルの枠組みを保育にどう生かすか

第２章では、19の思考スキルが、どのような場面で、子どもが遊ぶ姿のなかに見とることができるのかを紹介しました。さらに、それぞれのスキルを育む環境構成や援助の例を紹介しました。

この章では、保育の質を高めるために、19の思考スキルの枠組みを用いて、実際の保育にどのように生かすことができるかについて、３つの活用事例を基に紹介します。

ア）**子どもの力を見とる観点にする**

園内研修などでエピソードを分析する際に、子どもの姿から、どのような思考スキルを発揮しているかを見とることで、保育者の援助や環境構成を検討する観点にします。

イ）**保育計画に生かす観点にする**

子どものふだんの様子から、活動のねらいにつながり、育みたい「思考スキル」を３つ程度選び、その発揮が想定できる活動や援助を計画します。

ウ）**保育計画をふりかえる観点にする**

イ）の計画で想定していた思考スキルはどのような場面で発揮が見られたか、その際の援助がどのようなものであったかをふりかえります。

最初は、ア）のようにエピソード分析などを通して、子どもの姿にどんな力が芽生えているかを見とるところから始めるとよいでしょう。そして、少し慣れてきたらイ）のように計画に活用し、ウ）のように計画を基にふりかえりに活用するというように進めていくのがよいと思います。

ただ、日々の保育において、19の思考スキルをすべて頭にいれながら子どもの姿を見とっていくことは、簡単なことではないでしょう。そこで、事例では「思考スキル」を子どもの姿から見とる時に、中心的に発揮している思考スキルはどれか、保育計画では、発揮を期待したい中心的な思考スキルはどれかというように、３つ程度に絞っています。

実際の子どもの姿からは、もっと多くの思考スキルを見とることもあるでしょうし、子どもの可能性をなるべく多く見とってあげたいという気持ちもあると思います。ですので、まずは初めの一歩として、子どもたちの何気ない会話や様子から「思考力の芽」を、１つ２つ見つけることから始めてはどうでしょうか。そして、保育者は子どもたちの「思考力の芽」が見えてくることで、その力をもっと育む関わりにつなげていくことができるでしょう。

19の思考スキルを一度に見とるのは難しいけれど、
３つ程度意識することからならできそう

上記の他にも、幼児期に育まれる思考力の芽と小学校以降の学習活動で発揮される思考力とのつながりを示したり、小学校の先生と行う事例分析の視点にしたりするなどの活用方法が考えられます。

活用事例
ア

子どもの力を見とる観点にする

活用のヒント

子どもの姿からどのような思考を働かせているかを見とる観点として思考スキルの枠組みを用いたある園の事例です。子どもが遊びのなかでどのように思考力の芽を発揮しているかを見とる最初の一歩として、事例やエピソード分析への活用は取り入れやすいでしょう。

保育者の願いと子どもたちとの関わりの記録を基に「この場面ではA児はこの思考スキルを発揮しているのではないか」と見とり、他の保育者と共有することができます。

思考スキルの枠組みで見ることによって、子どもがもつたくさんの「思考力の芽」に気づき、それを遊びのなかで発揮していることに驚くかもしれません。そして、そのような力を発揮できるような、保育者の関わり方や環境構成の工夫につなげていただければと思います。

A園の事例より：「はてなのはな」　５歳児　春～夏

年長児のクラスにトマトの苗が届きました。
子どもたちには、その苗がトマトであるということを伝えずに「何の苗だろう？」と問いかけます。

【保育者の思い】
子どもたちが苗を見て、
何の苗かを
どう予想をするのか知りたい。

子どもたちが園にある図鑑や野菜の絵本をすべて集めて、葉の様子や茎を見ながら調べ始めました。

（図鑑を見ながらの会話）

A児　**「においは　ほうれんそう」**
B児　「にんじん　あやしい」
C児　**「このはっぱ　すみれのはなもあやしい」**

比較する　多面的にみる
図鑑と比べながら「におい」「葉の形」など、様々な視点から苗を観察している。

しかし、何の苗なのかは答えが出ません。

水やりを毎日してしばらくたったころ、
ついに花が咲き始めました。

D児　**「きいろいはなということは　トマトだよ！」**

関係づける
これまでの野菜栽培の経験と、見ている花の色をつなげている。

E児　**「きいろいはなだけど　トマトとはかぎらないよ。だって、きゅうりもきいろいはなが さくんだよ」**

理由づける　多面的にみる
トマトではなくても黄色い花が咲く、という理由で他の可能性を伝えている。

F児　**「においは　トマトだね」**

そんな声が上がります。

多面的にみる
「におい」がトマトだと気づいている。

そしてトマトの実がなりました。
「これは、トマトだね」

活用事例
イ

保育計画に生かす観点にする

活用のヒント

保育の計画に思考スキルの枠組みを用いたある園の活用事例です。子どもの現状から活動のねらいと内容を計画する際に、子どもにどんな姿が見られるかを思い浮かべます。ここでは、保育者は子どもたちが好きな絵本をテーマに、自分の好きな青色と実際の空の色を「比較し」たり、自分が作った色を「分類し」たりすることで、違いや共通点を見つけることを面白いと感じ、関連した他のことにも興味を広げてもらいたいと考えました。そのような子どもの姿を想定し、比べたり分類したりできるように、短冊状の画用紙をたくさん用意して、友だち同士で並べ替えられるようなスペースを用意することにしました。

思考スキルは「活動のねらい」に向かうための手段ですので、「色を『比べ』たり『分類し』たりすることによって、絵本の世界から、空に関わる自然現象に興味がわきそうだ」と期待し、そのための環境を考えていきます。

B園で作成した保育計画： 5歳児 11月

子どもの現状と活動のねらい・内容　①		
対象		**活動のねらい**
5歳児　11月上旬		違いや共通点を見つけることを面白いと感じ、関連した他のことにも興味を広げる。
子どもの現状		**活動の内容**
空想することが得意で、ファンタジー的な世界観を好んでいる。一方で、自然現象への興味や「なんでだろう」と疑問を抱く様子はあまり見られない。		絵具でいろいろな青色を作ることから、興味を広げる。
思考スキルの発揮が想定される子どもの姿　②		**保育者の援助　環境の構成　③**
思考スキル	**具体的な子どもの姿**	
関連づける	絵本「あおのじかん」で、日が暮れるまでのいろいろな「あお」を見て、子どもたちがふだん見る空と結びつけ、同じ「あお」の海のことなどへと関心が広がっていく。	子どもたちが大好きな絵本を用いる。絵本の話とふだんの空を結びつけて、自然への興味が高まるようにする。
比較する	自分の作った「あお」と友だちの「あお」を比べる。	絵本のいろいろな「あお」が載っているページを印刷して、作りたい「あお」を再現できるようにする。
分類する	色を比べて近い色で分けていく。	乾かすスペースを広くとり、友だちの色と比べられるようにする。 あえて短冊状に切った画用紙を用意して、比べやすくする。

【記入のポイント】
①：子どもの実態をとらえ、活動のねらいを明確にする。
②：活動のねらいに向けて発揮が想定される、または促したい思考スキルと具体的な子どもの姿を記入する。
③：②で想定した姿を踏まえて必要だと思う援助や環境の構成を具体的に考える。

活用事例
ウ

保育計画をふりかえる観点にする

活用のヒント

活用事例（ウ）では、前ページ（イ）の計画時点で思考スキルの発揮を想定していた事例について、計画を基にふりかえりを行っています。

実際の子どものつぶやきや様子などから思考スキルを見とっていくと、計画時点で想定していたスキルと、想定していなかったスキルがあることに気づきます。保育者は想定していたスキルを発揮する様子がどのようなものかを確認したり、想定していなかったスキルの発揮を楽しんだりしながら関わることで、子どもの「考える力」の育みにつながる援助や声かけがより鮮明になっていきます。

B園で作成した保育のふりかえり： 5歳児 11月

※活動事例（イ）のふりかえり

子どもの現状と活動のねらい・内容	
対象	**活動のねらい**
5歳児　11月上旬	違いや共通点を見つけることを面白いと感じ、関連した他のことにも興味を広げる。
活動名	
あおのじかん	

記録

子どもの姿　④	思考スキル ⑤	保育者の援助　環境の構成　⑥
• いろいろな青を作る 「星空みたい」「雲みたい」と空に興味をもち、作った色と空の色を比べたり、室内にある玩具を集めて色の違いを見比べたりしていた。 • 「夕方になり始めた青だね」「青だけどピンクが入っている」などの違いに気づく様子がある。 • 歯ブラシで色を飛ばして星空を作ろうとするA児。 • 最初はバラバラに短冊が並べられていたが、近い色同士で並べ始める様子があった。 • グラデーションで並べた時に、空や星につながっていった。 ●活動の後 • 星や空に興味をもち始める子がでてきた。 • クリスマスの装飾の時期に向けて園を「青の世界にしたい」という言葉がでてきた。 • ひらがなスタンプで星の名前を押すなど関連した活動が広がった。	関連づける 比較する 分類する 広げてみる	• 導入として「あおのじかん」という子どもたちが大好きな絵本を読んで「自分だけの青をたくさん作ってみよう」と始めた。 • 絵本にある、あおの種類の頁を印刷して、作りたい色をイメージさせた。 • いろいろな青を作れるように、紙は小さく短冊状にした。 • 短冊を並べる時に友だちと比べられるよう、広いスペースを確保した。 • 空に興味がある子がいたので、空の様子を表現できるようにブラシなどの画材を用意しておいた。 • 保育者として活動をつなげたい気持ちをもってクリスマスの話をした。子どもからのアイディアを待った。

【記入のポイント】
④：活動で見られた子どもの行動やつぶやきなどを記録する。
⑤：計画時に想定していた思考スキルを記入し、記録した子どもの姿をふりかえる際の参考にする。線で結んでもよい。また、想定していなかった思考スキルの発揮を見とれた場合は、ここに追加する。
⑥：思考スキルの発揮を促したと考えられる、保育者の援助と環境構成を記録する。

おわりに

変化が激しく予測不可能と言われる時代において、未来のことは誰にも分かりません。今の正解や常識は更新され続けていくでしょう。そのような時代に流されるのではなく、自分の意志で決断し、課題を立て解決に向けやり遂げられる子どもを育てたい。そのためには、生活や学びの基盤が形づくられる幼児期から資質・能力を育み、小学校以降へとつないでいくことがより一層大切になります。

本誌でご紹介したことが、遊びのなかで子どもが様々に「考える力」を発揮していることに気づき、周囲が環境や援助を考えるヒントになれば幸いです。幼児教育・保育で大切にされていること――子どもの思いや願いに寄り添いながら「考える力」を育む環境や援助が、小学校以降へと続く子どもたちの探究的な学びを支えると信じています。

● 研究メンバー

梅澤　京子　ベネッセ 新横浜保育園　園長
林　舞子　ベネッセ 川崎新町保育園　園長
鈴木 久美子　ベネッセ ひまわり保育園　保育士

佐藤　昭宏　ベネッセ教育総合研究所　学習科学研究室　室長
小野塚 若菜　ベネッセ教育総合研究所　学習科学研究室　主任研究員
杉田　美穂　ベネッセ教育総合研究所　学習科学研究室　主任研究員

企画・制作　（株）ベネッセコーポレーション　ベネッセ教育総合研究所
イラスト　葛城 彰　鈴木 久美子
編集・デザイン協力　神田 有希子

※ 本冊子は(株)ベネッセスタイルケアとの共同研究による研究の成果の一部をまとめたものです。
※ 肩書、役職は2024年8月時点のものです。